

近畿大学 × 東京海洋大学 × 東京農業大学 3大学による
『海の豊かさを守ろう』シンポジウム
開催のご案内

近畿大学 × 東京海洋大学 × 東京農業大学
海の豊かさを守ろう
— 海洋研究からSDGsを考える —
シンポジウム

ココリコ・田中?ん
特別対談?登場!

日 時: 2023年5月20日(土)
場 所: あべのハルカス 25階 会議室 入場料: 無料

オンライン配信決定!
お申し込みは、
下記のお申し込みフォームから

3大学進学相談会 同時開催! (事前予約制)

2015年に国連で採択されたSDGsは、環境問題やエネルギー、食品ロスなど幅広く各所でディスカッションされております。海洋の分野においても真に海の豊かさを守るための生態学的学びや技術に関心が高まりつつあります。

そこで、東京農業大学では、近畿大学、東京海洋大学にもご協力頂き「海の豊かさ」を守っていくための最先端の研究や技術、そしてその学びの重要性について中・高校生を中心に若い世代に広く知ってもらうためにシンポジウムを開催します。海の素晴らしさも改めて考える機会になれば幸甚です。

取材に関するお問い合わせ

東京農業大学 企画広報室 (〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1)

Tel : 03-5477-2650 / Fax : 03-5477-2804

E-mail : info@nodai.ac.jp

海の豊かさを守ろう

—海洋研究からSDGsを考える—

シンポジウム

未知なる海から新たな学びを探求する機会を、高校生など若い世代に向けて発信する

日本の海洋資源を守るため、各大学や専門機関では多様な研究と技術開発が続けられています。海洋研究の面白さ、奥深さを、広い研究の中からご紹介します。

海面魚類養殖のパイオニアである近畿大学、日本の水産科学をリードする東京海洋大学、そして北海道オホーツクで自然を活かした水産増殖学を展開する東京農業大学。各専門分野の先生からは最新研究を、大学生や大学院生からは「実学」を実践している楽しさを次の時代を担う若者に向けて発信します。

詳細情報

【日時・場所】 日 時：2023年5月20日（土）13:00～15:00 終了予定
場 所：あべのハルカス 25階 会議室 E・F

【プログラム】 後援・協力のご紹介

主催者のご挨拶 東京農業大学 学長 江口 文陽

1. 最新の海洋研究の話題・3大学の海洋研究の紹介 (各20分)

近畿大学 水産研究所 家戸 敬太郎 教授

「近大マグロの完全養殖研究と持続可能な養殖産業への貢献」

東京海洋大学 学術研究院 海洋生物資源学部門 團 重樹 准教授

「タコ類の生態解明と増養殖技術開発」

東京農業大学 生物産業学部 海洋水産学科 市川 卓 准教授

「サケを守り、地域を守る」

2. 3大学の学生・院生による海洋の実学の学び (各10分)

近畿大学大学院 農学研究科 修士2年 中高 誠一さん

東京海洋大学大学院 海洋生命資源科学専攻 修士1年 藤原 咲紀さん

東京農業大学大学院 生物産業学研究科 海洋水産学専攻 博士前期課程2年 三浦 雄大さん

3. 特別対談

私たちにできる海の豊かさを守る取り組み (約20分)

ココリコ・田中 直樹 氏 (MSC ジャパンアンバサダー) × 中川 至純 教授 (東京農業大学)

主 催：東京農業大学

共 催：近畿大学・東京海洋大学

後 援：水産庁・株式会社 共同通信社・AIGLE 協 力：一般社団法人 MSCジャパン

シンポジウム 講演要旨

1. 最新の海洋研究の話題・3大学の海洋研究の紹介

近畿大学 水産研究所 家戸 敬太郎 教授

【タイトル】 近大マグロの完全養殖研究と持続可能な養殖産業への貢献

近畿大学初代総長・世耕弘一は海を「畑」と捉え「海を耕せ!」という理念を提唱し、1948年和歌山県白浜町に水産研究所を設立した。当時、海水魚養殖は普及していなかったが、近畿大学は1954年からハマチの網いけす養殖法の開発に着手し、長期間飼育に成功。この方式は西日本各地に急速に広がり、現在ではこの網いけす養殖法は世界各国に普及している。さらに近畿大学では重要な養殖魚種を卵から親魚まで育てて再び卵を得て飼育する完全養殖に次々と成功して天然資源に影響しない養殖の実現に貢献してきた。1964年よりマダイの人工種苗生産と品種改良にも取り組み、1973年には世界で初めてマダイの養殖用人工種苗を養殖業者に出荷。その後も半世紀以上にわたる選抜育種を続け、成長や体色が優れた養殖用品種を生産・出荷している。

1970年からはクロマグロの養殖に着手するとともに人工種苗生産技術の開発を開始。全長3m・体重400kg以上にまで成長するクロマグロは、これまで養殖してきた魚とは異なる点が多く飼育はかなり困難だったが、長年の研究の積み重ねにより32年後の2002年には世界で初めて完全養殖に成功した。2007年からは養殖用人工種苗の出荷を開始し、近年では養殖用種苗の国内需要の約2割に相当する約10万尾以上を生産し、天然資源の減少が問題となっているクロマグロの安定的供給および資源保護に向けた取り組みを続けている。

東京海洋大学 学術研究院 海洋生物資源学部門 團 重樹 准教授

【タイトル】 タコ類の生態解明と増養殖技術開発

日本人は弥生時代からタコツボ漁を営み、タコ類を食料源として利用してきた。しかし近年、日本近海のマダコやイイダコが姿を消しつつある。瀬戸内海ではこの20年間でマダコの漁獲量は3分の1に、イイダコは30分の1にまで減少した。なぜタコ類は減少したのか、どうすれば資源を保全し持続的に利用できるのか、早急な解明と対策が求められている。しかし、これまで浮遊幼生や稚ダコの飼育が困難であったことから、タコ類の生態解明と増養殖技術の開発への取り組みは不可能であった。近年、我々はマダコ浮遊幼生の飼育技術を開発することに成功した。人工生産した稚ダコを用いることで、これまで未解明であった稚ダコ期の生態解明や、養殖によるマダコ生産に向けた研究への道が拓かれた。本講演では、最新の研究で明らかになったタコ類の生活史初期の生き残り戦略と、タコ類の増養殖の実現に向けた取り組みについて説明する。

東京農業大学 生物産業学部 海洋水産学科 市川 卓 准教授

【タイトル】 サケを守り、地域を守る

サケは日本の食卓に馴染みが深い食材の一つで、年取り魚として「西のブリに、東のサケ」と言われるように、食の文化にも深く関わっている。サケは重要な水産資源であることから、古くから人工ふ化放流事業が行われ、現在の日本におけるサケ資源はこの事業により維持されているといっても過言でない。サケ資源は1970年代以降稚魚のふ化放流技術の進歩、海洋環境の変化に伴い増加し、北海道では4000万尾以上来遊するようになった。しかし、この数年サケの来遊数は2000万尾程度まで減少し、それによる地域の経済損失は甚大である。産業が成り立たなくなれば、地域は衰退するしかない。その一方で、ノルウェーをはじめ、各地で生産された養殖サーモンは安定的に供給され、天然のサケの消費を脅かす存在となっている。養殖サーモンの生産量が増加している現代において、天然資源を守り、増やす意味について、地域とそこに住む人々を守る視点から解説を試みると共に、漁業とは、食料生産とは、食べるとは何か、問題を提起し、共に考える機会とする。

2. 3大学の学生による海洋の実学の学び

「実学」を理念とする3大学の学生から「実学」を中心とした学びを広く中・高校生を対象に発信し、海洋研究の面白さ、奥深さを伝える。中・高校生に海洋水産や海洋生物等に興味を持ってもらう契機とするとともに、数年後の自分を投影することで海洋学・水産学分野への関心を促し、次世代の水産業従事者の育成や海洋研究者の育成に繋げる。

3. 特別対談

私たちにできる海の豊かさを守る取り組み

ココリコ・田中 直樹氏 (MSC ジャパンアンバサダー) × 中川 至純教授 (東京農業大学)

日本は海岸線が長く、四方を性質の異なる海に囲まれた海洋立国である。そして日本の周辺の海は生物多様性が非常に高く、漁業資源にも恵まれている。私たちは遥か昔から海の生物を利用し、我が国独自の魚食文化が発展してきた。しかし、現在、日本の漁獲量の減少が大きな問題となっている。その背景には地球温暖化、海洋の酸性化、海洋プラスチックなどの海洋環境問題が関与していると考えられている。一方で漁業者の高齢化や燃料費高騰などの経営の問題、資源管理の難しさも大きな問題となっている。豊かな海からの恩恵を享受し続けることが難しくなると懸念されている。私たちが日本の海の豊かさを守るためには、まず海や海で起こっていることを知り、そしてどうすれば問題が解決できるかを考え、行動することが大事である。対談では、私たちに海とはどのようなものなのか？ 豊かな海とは何か？ 海では何が起こっているのか？ 私たちは豊かな海を守るために何をすべきか？これらの問いについて対話を通して分かりやすく紹介し、シンポジウム参加者の海の豊かさを守る取り組みについての理解を深めることに努めたい。